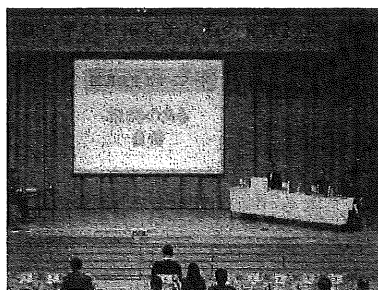


瀬はラーメンの町と言えないのではないか！」「ポッケの弁当販売不振の最大の原因は障害のある方々への偏見や差別にある！」。子どもたちも育ってきています。「親方たちがレンピを交換しているのは広瀬をラーメンの町にしたいという願いがあるから。そんな親方たちがいる町は、広瀬のほかにはない」「ポッケの皆さんの仕事を調べたり、一緒にお弁当を作ったりするまでは、自分も弁当を買いたいとは思わなかった」。内容の本質に迫るような発言が続きました。数年前、問題意識が希薄だと指摘されていた子どもたちが、現実社会の厳しさや理不尽さを自分なりに受け止め、自分事として考えられるようになった姿を目の当たりにしました。

広瀬の子どもたちがよく育っていることは、生活科と総合の授業づくりと学力との関わりをテーマにしたシンポジウムと田村調査官のご講演でも話題になりました。今回のシンポジウムは、子どもの育ちの姿をもとに、これまでの取組を検証しようという意図が明確であった点が特筆できます。特に、シンポジウムの冒頭、広瀬小の学校関係者評価委員を務める保護者の方の生活科と総合でわが子が変わったというお話は、取組の成果として大きなインパクトがありました。田村調査官は全国の小学校で生活科と総合で育ったくさんの子どもたちの姿をご紹介くださいました。そして、「体験と表現の相互作用」「探究と協同」「知のネットワーク化」などのキーワードを提示しながら、その重要性を子どもたちの育ちと関連付けながら解説してくださいました。

広瀬小学校が生活科と総合の研究に取り組み始め、今年で6年目を迎えました。これまでの取組の成果が子どもたちのよりよい姿となって結実しつつある感を強く抱いた公開研究会の一日でした。



(東北・猪股)

お知らせ

来年度の第7回全国大会は、九州個性化教育学会を中心に開催の準備を進めいただいておりますが、諸般の事情により、日程が変更になりましたので、改めてお知らせ申し上げます。よろしくご予定下さい。

開催地：福岡県甘木市 ピーポート甘木

開催日：8月9日(土)・10日(日)

なお、併せて開催の免許更新講習(選択講習)は、8月8日(金)～10日(日)の3日間です。

〈事務局への問い合わせ・連絡先〉

庶務部長 佐久間 茂和

〒338-0013

埼玉県さいたま市中央区鈴谷 3-9-14-510

TEL 048(678)1681

e-mail sakuma.s@s7.dion.ne.jp

日本個性化教育学会ホームページ

<http://koseika.com/>

日本個性化教育学会報 第20号

平成25年12月26日発行

編集責任者 事務局長 奈須 正裕

編集 広報部 中田 泰志

日本個性化教育学会

発行

平成25年 12月26日

発行責任者

加藤 幸次

日本個性化教育学会報

第20号

秋の研究発表シーズンを迎え、会員各校の研究発表会が開かれました。その中から3校を紹介いたします。

個別学習のさらなる発展を求めて

～愛知県東海市立卯ノ里小学校～

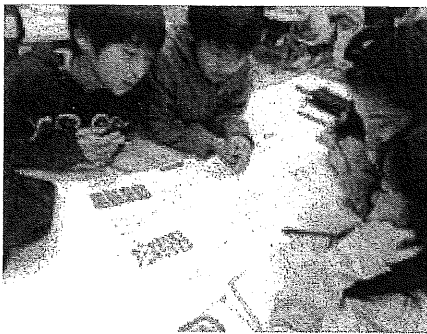
卯ノ里小学校では、平成23年度より研究主題を「学ぶ楽しさを実感できる個別学習」と設定し、継続的な研究実践を進めてきています。今回、東浦町現職教育の一環としてその研究実践を発表しました。ここ数年間は、表題にも示したように「個別学習」に焦点化した研究実践を進めています。当日の授業を参観して、卯ノ里小学校の先生たちが個性化教育の「学習の個性化」「指導の個別化」という核となる考え方を受け継いで、個別学習の実践を積み上げようとしている熱き思いを読み取ることができました。とりわけ、「学ぶ楽しさを実感できる個別学習」という課題に対して、「学びたい」「表出したい」「続けてみたい」という3つの欲求を学習過程に位置づけた個別学習のフレームに注目しました。子どもたちの学習活動ならびに彼らの表情から、その実践的な積み重ねの手応えを感じることができました。ここでは6年社会科個別学習「明治維新から世界の中の日本へ」の参観を通した感想をお伝えすることにします。

本単元は大きく4つの学習段階から組み立てられています。

- ①「つかむ」(調べ学習・一斉学習、ガイダンス、計画立て、校外学習を通して学習全体の見通しや動機づけにつなげる)
- ②「追究する」(「人物・政策・出来事・暮らし」というコースより個人テーマを選んで一人学びを進め、「スタンダード・ストーリー・チャレンジ」コースにおいてまとめる)
- ③「深める」(「同一コース」「違うコース」という2つの発表会を経て、子ども一人ひとりの学習を深め広げる)
- ④「まとめる」(一斉学習と総括的テスト)

本時は③「深める」という段階の学習です。「違うコース」の子どもが集まって行ったグループ発表会ならびに話し合いでした。子どもたちは自分の調べてきたことを様々な方法で発表し合いました。その方法は新聞、紙芝居、すごろくなど、多様なものでした。なかにはパソコンを活用して見やすいプレゼンにまとめている子どももいました。内容面も地道な調べ学習などに裏付けられた質的に高いものが目立ちました。そして、個人発表をもとにグループ内で付箋紙によるコメントを出し合い、「学習課題にとって大切なことは何か」を話し合い、大きな意見としてまとめていきました。

そのなかで見えてきた課題、それは「付箋紙の活用」を通した「個と集団の学び」のあり方でした。このことは授業後の協議会でも話題となりました。子どもたちの発表や話し合いの様子を見てみると、



付箋紙コメントを書くことにとらわれすぎて、発表者を見て話を聞いたり互いに話し合ったりする面が弱かったようです。そこで検討されたことは「付箋紙の柔軟な活用」についてでした。画用紙に貼った付箋紙をそのまま動かさずに話し合うのではなく、話し合うなかで付箋紙を動かしてまとめたり、マジックなどを使って相互関連を書き入れたりして「思考の活性化」を図るという指導方法です。そうすることで、個の学びを集団の学びに広げ、さらに個の学びに返していく、つまり「個と集団の双方向の学び」を保障する個別学習の姿が見えてくるのではないのでしょうか。かつて加藤幸次氏(1985)は「個が集団の中に埋没するのではなく、逆に浮き上がってくる」という、個の学びのあるべき姿を示しました。個性化教育の実践を通して、この問いに応えていきたいという思いをあらためて感じ取ることのできる研究発表会でした。(東海・近藤)

東京板橋で再び花開いた教科の一人学び ～東京都板橋区立板橋第一小学校～

2013年11月22日(金)午後、板橋区教育委員会教育研究奨励校(平成23～25年度指導力向上特別研究指定校)である板橋第一小において、「一人一人の子どもが生き生きと学ぶ授業づくり～学習環境を生かして～」という研究テーマに基づく公開授業研究会が盛大に開催され、多くの来場者を得て成功裡に終了した。昨年度は、同様の公開研究会が同区立大谷口小で開催され、会報でも紹介された。今年度板橋第一小での公開研当日は、本学会会長加藤幸次氏、事務局長奈須正裕氏、紀要編集委員佐野亮子氏、そして筆者の澤田、計4名が助言・指導役の講師陣に名を連ね、全学年1時限の公開授業の後、分科会(加藤氏：低学年、奈須氏：中学年、佐野氏：高学年＝写真1)、及び対談(奈須・澤田)というスケジュールで会が進行した。

この公開授業は、低学年を含む全学年で単教科ないし二教科同時進行の単元内自由進度学習の単元開発・実践提案であった。この学習は、発祥の地である愛知県東浦町立緒川小において「週プロ(週間プログラム学習)」と呼ばれていたものだが、板一小ではこれを「ITCHY学習」と命名した。これは一人学びの「一」と、同校のシンボルである大イチョウの木に因んで名付けられたもので、当日は同校美術専科の先生の奮闘により、ITCHY・キャラのデコマスまで登場した(写真2：大銀杏とITCHYキャラ)。

このように同校では、授業提案を行った各クラスの担任教員だけでなく、管理職はもちろんのこと、その他の専科教員、養護教諭、主事や事務スタッフの方々を含めた全校挙げての(それどころか、元事務の応援まで含む)チームワークによって多様な子どもの個性を尊重し、それを活かす自立型教科学習の研究が発表されたのである(写真3：公開前日の様子)。

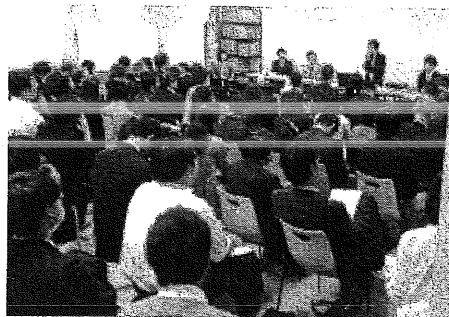


写真1

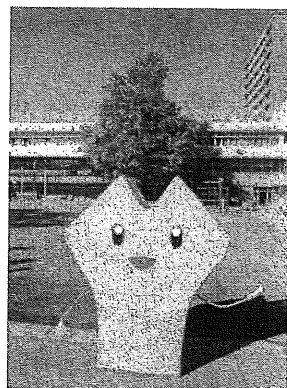


写真2



写真3

しかし、本当の勝負どころはここからかもしれない。研究奨励を受けてゼロからスタートし、この公開研で一つのピークを迎えたのは間違いないとしても、この一人学びの取組を日常化し、人事異動があっても安定的にこの取組を持続し、これを基盤としてさらに新たな展開を模索していけるかどうか、それによって教科の一人学び、あるいは都会的個性化教育を見たいなら板一に行けばよい、と言われるくらいの評価を勝ち取れるような学校に育って行けるかどうか。

これまで研究に関わってきた者として、次の展開可能性として、以下のようなことを考えている。

第1に、教科の一人学びに加えて総合的な自立型探究学習として緒川小で実践されていた「オープン・タイム」、現在の石浜西小における「わくわくフリータイム」の板一小ヴァージョンに取り組むことである。

第2に、ITCHY学習と板一版オープン・タイムの実践過程で作成されるポートフォリオを活用した「子ども主導の三者面談」を、日本で初めて導入する試みである。

私にとって、ようやくホームとなった感がある板一だが、再び初期の頃のような抵抗感、アウェー感を味わいながらチャレンジして行くことになるのだろうか。果たして、このチャレンジは功を奏するのか。もしその新たなチャレンジが奏功した時、個性化教育のさらに大きな花がこの板橋の地で咲くことになるはずなのだ。(東京・澤田)

「自ら学びを拓く子どもの育成～生活科・総合的な学習の時間を通して～」 仙台市立広瀬小学校 平成24・25年度仙台市教育委員会認定自主公開研究会

平成25年12月6日(金)に、広瀬小学校が自主公開研究校として取り組んだ2年間のまとめの公開研究会を開催しました。参加者は約250名。当日の日程は、公開授業・全体会・授業検討会・指導助言者(奈須先生・野田先生・猪股)によるシンポジウム・文部科学省教科調査官田村先生のご講演というながれでした。公開授業は、生活科が2コマ、総合的な学習の時間が4コマありました。

(生活)1年「ホップ ステップ ジャンプ～みんなハッピー大さくせん～」内容：(2)(8)(9)
(生活)2年「あしたへジャンプ」内容：(8)(9)
(総合)3年「知ってけらいん大作戦～ラーメン街道と結麺会～」内容：町づくり。
(総合)4年「ポケットとぼくたち～弁当でつなごう～」内容：福祉
(総合)5年「広瀬の地から(力)～おもてなしおはぎ～」内容：食・健康
(総合)6年「広瀬の人とつながろう～ジャズフェス@ひろせ～」内容：町づくり

今年度の総合的な学習の時間の単元構想と数年前のそれとを比較すると、格段にレベルアップしていることを実感しました。わけでも、単元計画に子どもの「問い」を引き出そうとする授業者の意図を明記できるようになってきた点が光ります。価値ある学習材を用いた単元の立ち上げや、探究のサイクルを意識した小単元のデザインの局面で、授業者は子どもたちから「問い」を引き出すための仕掛けを埋め込んでいました。授業者が子どもたちに現実社会の厳しさや理不尽さを突き付けていくのです。「広